類聚抄 第四

居所部

544
ル
10

類葉抄

第四

544
ル
10

九州大學圖書
九州大學圖書館
昭24. 7. 13
184057

居所部

都宮殿樓家
屋窟室寺塔
廬峇里宿許
前廨倉廐ころ
まさら 在府
閨窓戸樞
門庭砌垣籬
柱籭床座梁
壁廓板

類葉抄第四

居所

都 各所除之在別巻

一 太敷し京と置て 長歌

一 袂女乃袖吹反明日香風京都乎遠見無用尓布久 長歌
右歌ハ明日香宮ヨリ藤原宮ニ遷居之後志貴皇子歌ナリ

一 都宮者高所知むと 長歌

三 もゝしきの難波居中と所言せ之今ハ京引都備りまり

三 安見知らく吾王乃敷座在国中者京師所念

三 無遷時よ八成来京師よて誰手本とか吾将枕

三 在京師荒有家よ一宿ハ益旅而可辛苦

五 内日指京志らしよ皇家ハ 長歌

うちひさす宮へのほりハ長歌 (大意 ... 宮の内ハ高き ... 宮ハ都也 ...)

廿 さらにすゝみやこのいほりにつかへまつれは かるゝいのてらくあらと つかへまつりて

四 都路を遠哉いもか比来ハうけひてぬれといめにみえこぬ

五 あそふをみれはみやこしそおもふ

五 くもにとふくすりはむよはみやこみはいやしきわかみまたをちぬへし

五 あまさかるひなにいつとせすまひつゝみやこのてふりわすらえにけり

五 わかぬしのみたまたまひてはるさらはならのみやこにめさけたまはね

五 京師をとほみいつかいかしといへと

六 廬して都と成有旅にはあれとも

六 荒野等里ハ雖有大王之敷座時ハ京師と成ぬ

六 立易古京と成者道のしはくさ長く生にけり

六 をとめらかうみをかくといふかせの山時之往去京師と成ね

七 玉津嶋見てし善もわれはなし京に往而恋まくおもへは

八 田廬ニ居ハ京師所念

九 振山従直見渡京二曽寐不宿恋流遠不有尓

十 山遠京ハしあれはさをしかの

十二 客在而恋ハくるしいつしかも京行而君か目乎将見

十三 京師邊君ハ去しを孰解可

十三 久堅之王都乎置而草枕

十五 なく蝉のこゑをしきけはみやこしおもほゆ

十五 みやこへにゆかむ船もかかりこものみたれておもふことつけやらむ

十五 たひなれはおもひたえてもありつれといへにあるいもしおもひかなしも

十五 あしひきの山とひこゆるかりかねはみやこにゆかはいもにあひてこね

十五 あきされはおくつゆしもにあへすして京師の山はいろつきぬらむ

十五 けふもかもみやこなりせは見まくほり西の馬屋のとにたてらまし

十六 頃者之吾恋力不給者京地ニ出而将訴

十七 みやこにはかりつゝみやこそかし

十七 くらひとも有つゝ京都へ上りけり 上句 もとよりくろそ にさてさく 拾ひ集

十八 わすさるしなのみやこにおもひいらし かくつかくいはなけもあそかる いそのみやこハ田舎となし

十八 みやこへもをもにもいるふくいあへむるに かきはら

十八 みやこにかへるしもしき 新千

十八 こゝに比類あしくみや今日こそいかりおりしみやこゑも ミヤコノミヤ人や

十九 みやこは京之大路所思 上句 ……取時冊

十九 京師ヘとも世間もなやしと 新千 おなしく同じ

十九 よしの国家よ 新千

十九 京ハ京師遠すらね 上句明日香河こくにそれて後に出る

十九 皇ハ神ニし座ハ赤駒之腹はらふ田為を京師となしつ

十九 大王ハ神ニし座ハ水鳥乃すたく水ぬまを皇都となしつ

廿 みやこにふゆそもやへりこむ 上句 あをかきわかくいふか

廿 みやこにもすゝもきりいく 上句 いかわりのそへてくと

廿 みやこうしてもなれしかのみこそをやちこいなをかこゆるも

廿 のきうにうつゝくとへのみのかうとうしいふこそへみゆら

宮 名所 在ル所ア

一 天皇之神之御言能大宮ハ此間と雖聞 長歌

一 百磯城之大宮處 長歌 又大宮人巻く多

六 百師紀能大宮所 長歌

六 不可易大宮處 同 上句在世ア 又短歌

六 大宮地遷往め 上句在水ア 以ア

十七 つねまつらむ大宮所 上句在水 名所清久

三 百式乃大宮人乃 六巻 長哥 又百石木綿 六巻 百石城乃 七巻 百師木之
六 刾竹之大宮人 在家ア 又長哥 又云式サ竹式サシ竹ト点スイツレモ 不相叶 其竹ト云ヘシ
六 刾竹乃大宮此ニ定めけらし 長哥 まる也 布當宮にある
十五 佐須太氣 大宮人ハ 下句在人ア
七 皇祖神之神宮人 在人ア
二 皇子之宮人 長哥 此外宮人 在人部
一 宮柱太敷座ハ 長哥 吉野 秋津乃野にあり
六 宮柱太布座 長哥 哥真下乃畢よ
三 宮柱太敷奉 長哥
三 宮敷座 末句也 哥乃いま山よ
三 大宮之内二手きこゆ網子とゝのふる海人之呼声
十七 大宮之内まてもきこゆるあひきすと網子調ふる海人の呼声
十九 大宮内にも外にも光るまて零須白雪見れとあかぬかも
十九 大宮守つくれるまての貴くもあるかな 大宮菟路 よる天地とあれ さかえむと
六 大宮尚と将有之名良乃京と 長哥
二 朝宮と忌賜式夕宮と背賜哉
十三 朝宮仕奉而 長哥
六 常宮ト仕奉流 同 哥姿見知てまつる大宮之
二 常宮と定賜 同 哥不知之宮乎
二 常宮已高之奉而 同 哥木上之宮乎
二 行宮ふ安母理座而 同 哥さきくら京にり
二 久堅乃天宮小神ノ随 同
二 渡會乃齋宮小神風ふ 同
二 神宮小装束奉而 同

九 海若神之宮乃崗隔之　古今　同　龍宮也

六 まろうれむけさ川らむへに　上句在　柳ア

六 作保乃内ニ枉車と宮ニ動ニ介　上句在、

六 妻呼音ハ宮ニも動響ニ　鹿ア　上句在名所之行ア

三 宮仕とむ多藝乃野之上ニ　同　瀧ア

四 豊國乃鏡山と宮と定ニ　上句在　國ア

四 打日指宮ニ行兒と真悲ミ　下句在子ア　打日さすと云事詳都ア

七 さらいさすけ宮へのほりしと　古今　此哥ハ都也

十 撃日刺宮路行ニ　下句在字ア

十一 内日さす宮道ニ相之人妻垢ニ　下句在　妻ア

十一 打日刺宮道人雖満行　下句在　人ア

十二 内日刺宮ニハあれ也と鴨次草乃　下句在　月草ア

十三 内日刺大宮つかへ　古今

十三 内日刺宮舎人も　同

十四 宗知日さすらむ此にかせハ　下句在　女ア

十六 打氷刺宮をとてもな　古今

十八 さらめのそらむかへしきろの兒にさしいすき事かくやて二りふり
注　さらいむてもい私記とも宮家よて言よ云ハるにに賞すり
洞ニ云ふさ[illegible]よもうとへ書るらを(ゑ)ことりすいそふかへらへ

十九 宮乃裏ニちよりや鳴もしすへしらむいかなと　下句在　行ア　鳩ア

殿

一 高殿と高知座而上立國見とすれハ　古今　下句在樓ア

一 大殿ハ此間と雖云春草之茂生有　古今

二 大殿乎振放見者　古今

三 大殿於久方ノ天傳来し雪もしもれ　古今　此ハ詞也

十三 大殿之砌志らしみ露夏命　志あ弥ホ　七弁
十三 大殿と振放ゟ衿ハ白細布鷺奉命　七弁
十三 大殿とつゝ奉命　同
十九 大殿之出廻之雲莫路称　ナフミソ子
十九 大殿乃出毋峯保置此雲文あとう称　ちる在るア　前ノ反弁也
九 海若神之宮乃内儲之細有殿　七弁
十六 海神非殿蓋小　同
廿 芸乃 こゝろさうふしきゝやしさらゝいまさすして　ちるといつものらえしわ
注て云殿芸乃ふさひしらむらとあることのいそしふらけり
十四 芸能 これ乃らくころしりてうまむ　書殿つみ乃しし　ちるい称つまハらはありるみ　こもいもら
十八 多らきるの此芸てくれハこれまて　芸能　ちるさうとつきつ平す　ことなはきとて
十八 芸能 これ乃多らきるあふひさてゐめて　ちる大皇ハ記ゐふきるむ　うらぞ明の

十八 さらう児らハつきし芸能ハすらきねと　ちるなきまくらまもり　さきもとらわふ
廿 父母乃芸能く志利へ乃むくよくさ　ちる在るア　次ハ終也詳録ア
廿 表犯らうらはそしはくる追而芸乃にと　ちるすらせくとし　於来から乃せす　およめハおもし

樓

吉野川の河内小高殿と高知座而上立而見年　衿ハ岩
註て云樓閣也只大小作る樓のことい大殿よいい高殿とハ云へりとも　同雲内裏ヲ申ナリ
大云ハ奈能へノ一字の家也　八巻家て御ともあり入録ア

家

一 家吉開名告汝根　七弁
一 城よの八告め家とも名をとて　同　芸可まゝこ
二 家言ハ継てもつ年むし　同
九 家而と家とも不云　同
十三 家ヘハ家とも付岩　同
芸何け無まきまつらいすと　家きもよらぬと告するやさ程は言御し

十三 家にも家道にも不云　長哥

一 家毛所毛多奈不知　同

一 家之所偲由　末句也家之寺ヲ也　上句在柁ノ名所讃ア

一 乗備尓之家を擇　伝はならし　と顕し

三 梓火尓之家ならも出而　にらいよし　同　同哥

一 作家よか代わへて来座多公与吾も　よくむ　長哥　末句や

一 青丹吉寧楽乃家よハ万代よ樸もかよひむまうすると念勿

十七 奈良乃吾家小ねへ思ひ　長哥

四 奈良乃わきへとよすりてありや　ちらあらいかげうしてそらにたねらまうそ

四 佐穂度路家之上ホ鳴鳥之　上句在

六 刺竹の大宮人乃家と往佐保鉢山とい思哉も君

六 よらせこら着衣薄佐保風ハ疾莫吹及宅左右

三 よしこら古家乃里之明日香よハ

三 谷も零来為ら神之埼狭野乃渡小家も不有國　下句在手鳥ア

八 大口能真神之原小零雪ハ甚莫零家も不有國

九 ゑもまよま代これハ時こふ出ハあまてとこさと　とやさしくとわこいまうすわさき

七 めもからう紋盤と来郷山雲莫蒙家當之

七 ありへと吾家よ住右之岸乃黄土としもしもこうか

七 墨右之岸小家も欲得奥小遊小縁白浪見乍将思

九 竹嶋乃阿戸白浪ハ動とも吾家思五百入鉋染

九 高嶋之阿渡川波ハ驟とも吾ハ家思宿かなしと

九 大椙之頭よ家わいハ心悪久独去児小宿も借申を

九 泊瀬河夕渡来而我妹児之家門をつまふけり

九 家よ此名木之川邊と泊ら立こ事念しもろ

十一 青山雲座隠雖遠家不言公念

十五 ひとりのみきぬる衣のひもとかはたれかもゆはむ家はるかなる　上句在妻ア　不所ア

十五 わかせこかゆきのまにまにおひゆかは　下句

十五 わたつみのかしこきみちを家にいへはけふもかくしもゆきてはやこし　上句ナキモノ（？）　ゆきてとをこし

一 家在妹と懸而きつつ　上句在夜ア　妹ア

一 家尓有妹を忘而念哉　上句在　忘貝ア

八 家ニ有妹常ニ所思　上句足引之山霍公鳥渉鳴ハ　巻十二巻家有妹やいふりこせむ　上句在妹ア

三 家有ハ妹之手将纏草枕客ニ小臥有此旅人阿怜　聖徳太子（？）御歌

三 家妹之　上下句在堀ア　妹ア　巻十二巻　濱ア

四 家妹ハ物不語来而　上下句　在妹ア

六 在家妹之待将問ハぬめ　上句在堀ア　妹ア

十四 伊敲伊毋　いへのいもかいふすきふくもあさしいろし　上句在家ア

十五 いへいてゝ いくかもあらぬにまつまよと　上句在月ア　妹ア

十五 いへにあるいもかことはにおもひいてゝ　上句ゐのいさよひ八おもひつゝ　わくつましし

廿 いへのいもかろかへしいまさていねかてにいつすゝねかも　上句在堀ア上心にいつも　さこかよ

廿 いへの母かこのしろもわかつまにもありて　上句在妹ア　妹ハいつもや

廿 いへにいまこもそて母もや　上句在てまかてゆくりしてころに　也母也ハ詞ア

二 いへ家も継て見ましを山となる　下句大島嶺ニ家もあるらは　式ハいつもあるらん継てもみよ

三 畏命妹き家畏為　上句伊勢海之奥津白浪花小欲得

三 妹家ハ開有梅之　下句在　梅ア

八 妹家よ開有花之　門家

七 妹家之門とゝせと　下句在　門ア

五 妹家ハ早将至歩黒駒　上句在雲ア　馬ア

今毋陞 いもへにゆはもかもしこらまたねふ　下句在　梅ハ家と

十 いもか家道小暗晩川　上句在 春曙ア
十 いもか家道不止通　上句在 七夕ア
十九 いもか家道ちかくわかせかけしめね　下句在 名寄浦ア
十 いもかいふす家忘将居　上句在 田ア 妹ア
十二 玉緒之間も不置欲見吾思妹ハ家遠在而
十二 玉数有家もるにせむ八重しく霞小居し妹与寝ハ　古哥
十三 王宗妹もわかといふこそ同じ家をもゆかめ　古哥
十四 ゆくつ宮にいもの雅かふりゆきのゆきすさそれいもかいへのあたり
十四 わかりよいもかいへのあたりて　上句在 石ア 馬ア　わかハ我か家也 いもか家也
十四 まとけくれとも升小んゆかいもかふいつかいてむあゆかめかこ海
十七 いもかふいらりれのりの方覚　下句在 旅ア
三 兒等之家道差間遠とねハつまれ　下句夜まくら月小 きけいめへむて

九 家子等携めかへして　長哥
九 富人此家此子等此さつの見かさま　下句在 子ア 郷ア
十二 吾念兒等之家當見津　上句在 葉ア
十四 いでそふせしとかへそしいへのこゑハも　良 上句在 門ア
萬 めさすかへむいへのころかも　呂 上句在 子ア 馬ア
八 よゆもうち家乃垣内乃さゆり花　下句在 百合ア
九 向まみかはしきうまれにもか家のきかり　長哥 末句也
二 御在香乎高知座而　円
二 家来而吾屋を見れハ玉床之外向来妹か木枕
四 家有ハ筍小盛飯と草枕　下句在 推ア 飯ア
四 宅有八て待忘ねつらむ
四 天地こ共久住いむと念而あかりし家之庭ハも

五 家よわしハ母とりまかし　七五 おもふところハわすれまじき　本ハ歳 或云のちハ来し
五 家にわりて母とりまいらせしもの　七五
五 家あるしハかへらいハわすれ　と
七 家にわかれとまろこ　かしは心すゝ　玉緒食桑家在と　縣に青蒙被
十六 家在猶いかもの葉にあらし　下句在逢ア
十六 家に有各積に錦さし藏而し　芋ア 横ア 下句在奴ア
三 家ハいつこ何處白雲のかゝる山路を越て来にけり　第一句ここに 何の［illegible］
三 家当不見まろし　当火之明火門外入日共榜也くしつきし
四 家当吾立見ハ　七五 あるつくもの情もなくや
十一 家当手不止振ノ　上句白細之袖ハまとひくきをところ
四 家と隅而悪く将帳　上句人事と繁花と　鞘さや 二句のさやぐとうしきや
五 家にゐてうちそむきあり　上句人ごれもあらむはしあれ　かくくの真しきるかなといふせとし
九 家帰而父母に事し告むい　七五 行旅のあら事也
十三 入りかし人家に到るや　同 なりや
四 家乃樽　同 為行し
九 家云哉又還不来　同
九 家ゐもたんせん　同
四 家にあれはかくもあやしと草枕客にて暮となりなむ
七 家にても後ハ将悪女印南野乃　上句浅茅しこ乃月表と
十七 家よりも名にて谷へ浪の上へ小里にもとをいかなるせしまとも
十七 家よりていかてゆきまさりとならけれて　下句在 細ア
廿 家ゐてあつかわるかもかけなたらぬかりてさいるいてうかし
九 家ノ如解而宵遊　七五 ていふらいの余の事し　家おなりの乃に任も命と
十三 家鳥可鶏も鳴　七五

四 家ハよ出てめくりて川津みて　よみ人在　歌よみ人よ書きて

九 家使ひかはし吾妹子にと見すとねつもとおもひけり

九 家人の吾をまちすらむと問使ひ小為　よみ在　長歌

十一 家人は路もしきかにりけりくも　よみ人そりけり使をねそして　そは葉はしくかしとかやそもとにかし

十三 家人のまつらむも妹と津ゆかも去　よみ在津ア

十五 家人いはへかへりこといひし葉よ　よみ在ア　世よりて家人非ト家　長歌

十五 家民かいとまも称ゆ　長歌

十五 家へもちらさむとあさりつつとくと　よみ世のみたらしみいすらするあまよ

十五 家へまちこふらむよ　長歌

廿 家へのいつとも待とどかくいふかいふむ　よるいうて野よやとりすりきみ

廿 家人の結ひしふかわしいちもしてしも　よみあそていしねとあそふ結ひ称

廿 いはとろを結ひてへとあとくちかゆりしてらん　よみまつのをきかちかうかくしは

廿 詠会ハ家へ也いふとも以下もいはとして云々紀同事へ旬内桐通此

廿 故にたらしもとるくもよ立しめや

廿 保波呂ハ安之布あすとも　すまと　よみつらはいかりてこふきもて

廿 伊波呂の布ゆらもめくもくまきま　よみあひぬうしうつ家あまきて

三 伊波つらわかの家もこ所称む　説会あいろいは家也あそふきもちわかしいきんやまや　訓よ言ハ言ノ聯く　よるくさまくうくあいゆくせなか

三 保波のをもいきくふとしもし　よみありのくさうかたそすてふかふ　こもしもいきんとせなししてゑそてし　家のつ稀守り　まきりいせふ

三 保波のいさ呂よみ貴の宿しきもをといふ　よみ在紙ア　まうい初や

三 布細乃宅とも造(ツクリ)豈玉乃年備(ノシ)長久(ナカク)住(スミツ)、　長歌

三 敷細(シキタヘ)乃家とそしきみ　よみ　在今ア

三 国云有家待(ニメ)うくふ家ア　よみ在

三 在京師(ミヤコナル) 荒有(タル)家ふ一宿(ヒトリネ)ハ益(マシ)猿(サリテ)可辛苦(クルシカルヘシ)。

三 人もうき空家(ムナシキ)ハ草枕猿(ニサリテ)ふ益(マシ)辛苦(クルシ)有(カリ)けり

三 馬ノ爪突家悪らしも 是ハ在筑前 [illegible] 塩津山

七 吾馬爪衝家思らしも 是在ハ門 馬 思 家コフトヨム

七 吾馬難家悪らしも 是在馬 [illegible]

三 思家之情進莫風候 下句在風 [illegible]

三 離家いまする吾妹を停不得山隠つゝ情神もなし

七 離家旅にし在ハ秋風寒暮に鴈鳴わたる

十九 離家遥に出立 歌 十五巻 [illegible]

十九 離家こゝの経去ハ 歌

十一 去家命 [illegible] 在[illegible]

十九 廻家 歌

三 宮家ハさらにあれとも何方に 歌 [illegible]

六 [illegible]家も荒有 歌 [illegible]

十二 [illegible]家[illegible]長[illegible]吾目之 下句在 [illegible]

六 下[illegible]家[illegible] 是ハ明[illegible]千乃[illegible]

十五 [illegible]

四 遠家路と[illegible] [illegible]

五 [illegible]

十三 家道[illegible] [illegible]

十三 家道[illegible]

四 君家の吾住坂乃家道とも[illegible]

四 [illegible]之家乃[illegible]住云[illegible]

八 君家乃[illegible]

八 君之家ハ[illegible]

八 君之家有[illegible]

十 君之家乃之黄葉早者落 下句在而ア紅葉ア 乃之二字古本ナシ

十九 君之家ニ殖有萩子之 下句在 萩子

十九 君宅之雪ハ巖ニさへおりけりし よるをてしらは秋くのみと

廿 さきらいへのいほりのみはいそにも 下句在池ア

四 覊行君之至家左右 上句天地之神も助よ家ア 下句在 猿ア

五 まひ此方のはあうこそねりし 上句在海ア

五 まきのみなみにさけてちるとも 上句在梅ア

五 まきくはちもいはもはるにさそしる 上下句在汀ア

七 吾家乃毛桃 上下句在 桃ア

八 吾宅乃苑ニ鶯鳴し 上句在鶯ア

八 吾宅之梅乎 上下句在 梅ア

十 吾家有梅乎花落つゝ 上句在 梅ア

八 吾家乃里ニ今日耳可鳴 上句在 郭公ア

十一 吾家門過行 上句在 門ア

九 豊国乃かゝみ吾宅紐解見ニいつりけもはらなは吾家

十八 つかくに吾家しおもほゆ 上句あきひ

五 いにゆきていつかあかもひまくつかし 下句在 鷹ア

六 気長有ハ家之小篠生 上句いろきの 小篠ハ篠字歟

六 水鳥にも有家不念有も 上句在 鴨ア

六 秋千今も在やも旅衣平家ニハ

九 及七日家ニも不来而 古寄

九 従家出而三歳之間ニ墻も無家滅めやと 古寄

九 如本家ハあらむと玉篋小披ハ 古寄

九 墨吉ニ還来而家見ども宅も見ぬて 古寄

三百白点

九 水江之浦嶋子之家地見 七首 あるや
十 梅花さけ・無遠小家居也之ともしりし鶯之音
十 梓弓春山近家居之續而聞良牟鶯之音 上句在雪ア
十 山傍就而家居せる君 上句在雪ア 山ア梅ア
十 立つゝし稲葉搔別家居者乏わし秋之葉風
十九 翁さひて家居有 七首
十九 多ふちらく山へのおれしも 内
十 木晩之暮闇有小霍公鳥いつこを家と鳴わたるらむ
十一 人之古家小相語而遣都 上句在鶴ア 人の古家と書ていへるをわするゝ傍例多
十三 世間を倦しと思而家出せしわれやなにゝか還而将成
十三 親々己家尚弃草枕 七首
十三 別避ハ宅よ離南 内

十五 わかせこかいへのさとにうきまゐり 下句在浦ア
十五 いへのさとにいりにわかせこと 七首 前句在春ア
十五 いへのさとにしなと思ひ弓と 下句在辰ア鳥ア 見てふひとつもの
廿 いへのさとにいそしてへふる雨にまよふらは 下句在辰ア鳥ア 見てはいとつもの
廿 いへのさとみしあつさ立てきも 声ミちゆくりつゝいと ひとよひと
十七 いはねふらむよまさりいへとそなりける 上句わかの浦とこゝの船の つらきうし
十七 日かくれのやまの家そすなりける 上句多まいりもしとれなかり あまいつゝ 伊勢
廿 くろくにいへをなりいて 七首 かゝつにいかつく
廿 いへやりをと伴せと孫とを紀にあるへつゝく 上句在霞ア 鶴ア
十七 孫にねくあつちを宅にうへ多く 下句在 櫻ア 修敷
十八 都毎まふていへよハゆりむまつさなる 下句あつまたゝ なりしにて
十九 家ゐら去而たふにとくてむわしきかみつこしをしくらへ一音をきゝたる

廿 いへゐのいふくゝ[illegible]とりゝてくらしはてもなし　伊勢

いへゐハ我家[illegible]

家の[illegible]

廿 あさらしさ[illegible]いふにつき[illegible]　廿一

二 屋

二 枕付嬬屋之内ニ畫[illegible]　同

注[illegible]

五 摩久良豆久都摩夜 まくらつく[illegible]　高在家ア

十九 枕附つまやの内ニ鳥座ゆひ　廿一

三 さ[illegible]つま屋ニ　廿一　同書云妻[illegible]

二 家来而吾屋[illegible]之　下句在 家ア

三 蘆屋立[illegible]勝[illegible]手兒名之　廿一

九 智奴壮士宇奈比壮士乃蘆八燎　同

四 板蓋之黒木乃屋根ハ山近之明日取而持将参来　廿一　洋語ア

五 楚取五十戸良[illegible]寝屋戸[illegible]来立呼[illegible]

七 夏[illegible]房之下[illegible]音味　下句在 国ア

七 静し岸ニハ波ハ縁[illegible]此屋通聞乍居ハ

九 黒玉夜霧立衣手高屋於霏霺[illegible]

九 葦屋乃うなひ處女乃　廿一　付巻又在けり

十一 難波人葦火燎屋之酢四手雖有己妻こそめつらしき

十三 夢[illegible]天之足夜手　廿一

十 朝霞鹿火屋之下小鳴蛙　下句在 蛙ア

十六 朝霞香火屋之下乃鳴川津　下句在 蛙ア

[illegible]

でうことうかきこえし行る郷家とつまとよるをともいふといはれも見えしける
人をうなきこゆるふりにて人の紫れにかくれのくさ杉ねかふかたをうけ
てやう宮のくさきさとかいひて庵するのよろしきと其鬼比幣の多く
ありくて郷家とるわやもうるに入しなりもしゆめ氏紀ハ其家かもあるに
くいと古顔名の詞小あるきり口とえこゆり杼ハけしきといいてんしくめ
乃飄泪かあさりくすましとけりや乃家すゆ泊え冬のあく浮ゆゆへつり

十二 彼方之赤土小屋小霂霂零床共所沾於身副我妹

注て人云条句式いさくて甚と甚いあしいるいすと出いふと云は歌は行う
さりへゆふの小屋と云つてその小屋とハ垣のへと出して行つり

十四 八重山乃霞小気し妹本居ハ　よる在家ア

十三 刈将焼小屋之四忌屋よ　七并
自東至于屋ハ家小く作る家也せハ本家也

十三 甘南備乃清三田屋乃垣津田乃　七并

十 瀧屋之わこにのうと　同

十四 多紀乃こ屋はゐかなうつけあふ此　下句在

十六 夕附日指哉河辺小構屋形乎宜ミ諾因来

十六 橘寺之長屋小吾率宿之童女放ハ髪上つらむか

十六 橘之光有長屋小吾率宿之宇奈為放小髪挙つらむ

十六 席小衆古屋と載る青烈小　下句在例ア

十六 梯立熊来酒屋よ真奴良留奴和之　七并

十六 奥国領君之染屋形黄染乃屋形神之門渡

九 梳もうし屋中もえらしくさまくつ身の行君といふことありて　ありて点た

庿　雑除名所依け郡サ　名所入く

三 志のすき久米乃若子かいましける三穂乃石室ハ見れとあかぬかも

三 常磐成石室ハ今もありけれと住ける人そ常なかりける

三 石室戸よ立在松樹汝を見れハ昔人を相見如之

右三首博通法師往紀伊国見三穂石室作歌

三 大汝少彦名乃将座志都乃石室ハいく代へぬらん

室

三 吾屋戸尓御諸乎立而枕辺尓斎戸乎手作 長哥

十一 新室壁草苅尓御座給根 下句在第ア 旋頭哥也 一本御坐出し

十一 新室踏静子之手玉鳴裳玉如所照公乎内等白世

注云わてしきやふき此屋はふるや此書とかりけるを云あるを……詞のゆかり

十四 介比牟路能こときふはいぬれはくさすき 下句在薄ア

十四 武路かやのつるのつゝみのなりぬかに 下句在從ア

注云むろやとは高くりつゝミ……

寺

四 不相念人乎思者大寺之餓鬼之後尓額衝如

十六 橘寺之長屋尓吾率宿之 下句在屋ア

十六 寺寺之女餓鬼申久大神乃男餓鬼被給而其子将播 云

十九 物部乃八十乃をとめらか挹乱寺井之於乃堅香子之花

塔

十六 香塗流塔尓莫依川隅乃屎鮒喫有痛女奴

廬

一 金野乃美草苅葺屋杼礼里之兎道乃宮子能借五百磯所念

一 吾勢子波借廬作良須草無者小松下乃草乎苅核

十二 暮相而朝面無美隠尓加気長妹之廬利世里家牟

二 狭岑之嶋乃荒磯面尓廬作而見者 七句 二字シイホリトヨム

三 皇者神尓之座者天雲之雷之上尓廬為流鴨 雷ハ山ノ名也

三 珠藻かるからにの嶋乃野嶋の崎尓廬為吾等者 文十五巻 二字シワレトヨム

六 廬して都と成有旅にはあれとも 七句

六 木綿畳手向乃山乎今日越而何野辺尓廬将為子等

六 河口之野辺尓廬而夜乃歴者妹之手本之所念鴨

七 竹嶋乃阿戸白波者動友吾家思五百入鉋染 竹嶋ハ高嶋也 白シ河トヨム

七 隠口乃泊瀬山尓盧為云 上句狂語ノ逆言歟

九 山跡にハ聞往か大我野之竹葉苅敷廬せりとハ

五 布勢伊保乃麻宜伊保乃内尓 云々

註ニ云すこしもうこてまろやのまろ屋なりと云こと

目安言ふせいほとハわらのいほ付るやしき家やまいほとハまろやそてもあてそ 作能也

八 田廬尓居ハ京師所念 上句在田ア 目安云田廬を守庵也

十六 うちハ田廬乃もとにわかせこハにほふてふに咲て立すらむ

九 ちぬ壮士うなひ壮士乃廬八燎 云々

七 あしかの備廬ハ作何雖小吾兒之堀干よ玉ハひろくとも

廿 七 舟盡可志振立而廬利為なこ江の濱邊を過不勝かも

七 真木柱作蘇麻人伊左佐目ニ借廬之為と造けめやも

八 秋田苅借廬も未壊ハ鴈鳴さむし霜も置ぬかに

十 秋田苅借廬之宿ハにほふ及さける秋茅子ミれとあかぬかも

十 秋田苅借廬を作りわか居れハ衣手さむし露そ置にける

十 秋田苅客乃廬入尓しくれふり我袖ぬれぬ干人なしに

十 秋田もる借廬作五百入為而有らむ君をミむ縁も欲得

十 蜻野之尾花苅副秋芽子之花手葺さね君か借廬

十 梅花令散春雨多零客にや君之廬入せるらん

十 春霞たなひく田居に廬付而秋田苅まて令思良久

十 鶴鳴之所聞田井尓五百入為而吾客有と於妹告社

十五 み川手花りけふにあれて 云々

十五 大伴のみ川にふなのりこきいてゝいつれの嶋にいほりせむわれ

十五 こいをもまるくさみゝ経ていほりなるうきまけれ作保利すらも

註ニ云作ハ霞の義なりけるにしろやらん

又後部作入歟

十六 世間之繁借廬尓住々而将至國之多附不知聞

十六 難波乃小江尓廬作難麻里弖居葦河尓乎 長歌 葦刈小舟の蟹也
十九 蘆のやと備庵ハ造湾廻すり人とハ不知よあまとやうへん
廿 あひのかりほよやとゝ神ひつゝ よあまちねのそとをまうれて まとゝまし

苫

十 秋田苅苫手揺つゝり白露ハ置穂田なしと告ニ来らし ケラシモ 他本
雲隠 谷不 橘ノ花チル里名而ミゝ濡ミゝ
二 吾妹児之里ニしありてハ慰欲見と 長歌
二 吾里ニ大雪落有大原乃古尓之郷ニ落まくハ後
廿 吾郷ニ今さく花のとゝろ 下句在
三 浅茅原曲曲二物念ハ故郷之所念まし
三 故去之里と不忘ゝ多め 上句在
六 故去之里ニしあるハ 長歌 久延乃ゝをふにある

四 情ニもしも我ハ思もすへ又更てとも故郷ニ之人のこしと
四 古郷ニ出月こともあり勝まりてと 長歌 未句也
四 鶉鳴故郷従念とも何如し妹ニ相縁もなき
八 鶉鳴古郷之秋芽子手思人共相見つるも
十 故郷ハ遠も不有一重山越我らして念そ吾せし
八 古郷之奈良思乃岳の霍公鳥 下句在
九 石上振里ニ紐不解丸寐をすれハ 長歌
十 故郷之神名備山ニ 長歌
十 故郷之花橘ハ散ニまとのして 上句在
十 古郷之始黄葉と
十二 人もなき古郷ニ有人と愍久也君之恋ニ念死
十九 鶯来時ニ成ねと鳴之鳴ハ本郷思て雲隠喧

三 里家ハ左ハよわきしとも　きさしきも

六 里ハしも澤ニ離有　同　濱ハ備ニも多也

二 うや遠ニ里ハ放ね　同

十二 弥遠ニ里離来ぬと　同

十二 里離遠有莫国草枕旅之しおりへい尚悪来

十一 里遠ミかしかれニきり直妻濱　下句在鏡ア

十一 里遠悪としゆきり直妻十鏡面影不去夢ニ所見社

十 山遠京ニしあさいさゆしの　下句在山ア

廿 遠有ハとしても有と里そありと聞つゝねかゑ使かさ

四 [illegible]里ハ不遠里と雲井ゆ無将居月も経ゆくよ

六 愛也思不遠里乃君来と大能備ふりし月の照有

七 視渡ハ近里廻を田本欲今衣吾来礼巾振之野ニ

十三 里人の家ハ[illegible]吾妹子ヤ人目乎為乍悪般毛　ありかかさいし　おもひやしき

十七 さとちくきとあつりるい山しあやと

九 たつきの沖ふりきへのさと也かいとかい　鴨在

六 荒野等ハ里ハ雖有大王之敷座時ハ京師と成ね

十 馬なめて往まし里と　先布

六 りしきの大宮人い今日もも暇をうしと里ニ出うさし

六 里ミ秋ハ家も荒有　同　ミのいふかあり

九 里ミい里も見ゆ経て　同　すい酒ゆしし

六 里ミ秋ハ里も住吉　同　奈良ノ京しも

六 住吉里の荒楽苦惜し　同　ミみいいふかあり

六 川次之立合郷と　同　布當ノ京ニあり

六 大夫之高円山ニ迫有ハ里ニ下来隠むさつしいろ　卅二

六 里ニハ月ハ不曜ともよし　上句ミえずもあらし行人ハ旅ハ高ミ

七 五鳥里乃隠ん情も　上句奥津梶漸ゝ志ぶきまゝ行

七 山寺之里通山道ハ茂盛来来しも

八 吾家乃里ニ今日耳乃鳴　上句在 歌云ア

八 事繁里ニ不住ハ今朝鳴之鳥ニ副而去まし物を

十 里人ぞ聞悪まて　廿有 歌云事也

十一 里人之言縁妻を荒垣之　下句在 垣ア

十一 玉桙乃里人皆ニ我恋めやも　上句遠有而と云ふ玉桙ノ里とつゝ年

十二 里人も謂告ぐ縁もがな恋ても死なば誰名ならむや

十三 甚里人ぞ標結ふ閑てし日より　廿有

十三 数度人の行し跡ニ　廿有

十三 里人の見る目ニ告らく恥こゝろ　廿有

十七 佐刀いはれあまたにつくしよ　廿有 わたらひ秋也

十四 許霄能左刀姚等阿良波左来可母　下句なほ猶かまびとも出て 見なよヨソノ里人也

十八 左刀いまそ見るらむつゝ見ニさとハすゞしろや　てきつゝ

十 里異霜ハ置らし高松　下句在 松ハ円也

十一 沫雪千里零散志しくハ　下句有 雪ア

十二 里中ニ鳴なる鶏之　下句在鶏ア 式云里動鳴成鶏

十二 いつ里の日よりか秋里とこし　上句ミ宮つ城乃大山りとゝ

十三 朧里ニぞ宿ぞ借まし　上句在 家ア

十四 さとのこふかおくかせふりも　上句もしほ野をわけていくつゝく さとのふ真中や

十四 たれつるならとあさとかつ秋さむは、さく　下句とつ、ちさわれこゑらの むかしのつまとハ秋霜也

十四 手佐刀ゝりそおちらちろ我　下句在歌ア 見歌云并一句とちゝ里と

十五 ほとゝぎすゝいさとハこゑか枕とよりもす　上句里と 歌云ア

十五 ほとゝぎす鳴つるかたをながむればたゞ有明の月ぞのこれる　右在郭公ア
十七 ほとゝぎすまつとはなしにひとり寝の　右在卯ア　同
十九 さ月やみともしの松のほのかにも　右前
十九 霍鶯鳴くとも
十六 心乎之無何有の郷に置たらば　右郭公事也　円
十七 佐保姫の霞の衣を　右前　カカウノ卿ハ仙家也
十七 こゑたてゝなくほとゝぎす　右在ア
十八 つきにまたぬ　右郭公也
十八 たちまちに　右在ア駅使也
十八 ゆくとしの
十九 朝霞継霜者置吾妻野に吾こし
廿 はるのよのやみはあやなし

宿

一 草枕多日夜取世須古背念而　右前　未句也
二 遊士こゝろはれいきけるを宿戸不借ともかくせり於吾縄風流士
二 遊士小我於りけり宿戸不借人せおそれ乎風流士ハ乎
三 数藻相て宿常念而　右前
三 宿前に致て時ハ　在紀ア
三 宿前之殖生立而て居而　上句在樵ア
三 宿前乃石竹　上句在瞿麦ア
三 草枕羈宿小誰嬬乃思念有家待らん小　三ノ
三 何處吾将宿高濱乃勝野原介此日暮去者
三 吾宿戸小御諸と立而　右前
四 我宿ニ之簾動之秋風吹　文八巻ロ同在之

四 吾屋戸之若木乃梅も　上下句在梅ア　宿ノ在梅ア
四 吾屋戸之暮陰草乃白露之　下句在、草ア
四 吾屋戸之草上白久置露乃　下句在 露ア
四 吾妹子之屋戸乃籬乎見尓往者　下句在門ア　籬ア
四 吾者八屋戸開設而吾乎しゝ夏小相見尓将来云比登乎
四 何時まてもとゝふれ猟屋戸小入将座
四 三香之原客之屋取尓　也首
六 客乃屋取小梶音聞　ちあまやとめあつし小舟こえひも
六 鳴嶋まても吾宅とらいへ　首
六 門小屋戸ふして珠数まうしと　上句轉公来座むしと気もれにい
六 久堅乃雨ハ零敷念子之屋戸尓今夜明而将去
六 吾屋戸乃君松樹よ零雪之　下句在 雪ア

七 吾屋前小生土針　下句在 針ア
七 志長鳥居名野乎来者有間山夕霧立宿者無為　武蔵名乃浦も とこ乎なし
七 足引之山行暮宿借入妹立待而宿将借も
七 吾妹子之屋前之秋芽子　下句在 萩ア
八 室戸在櫻花八　下句在 櫻ア
八 室戸よ有櫻花乃　在櫻ア
八 吾屋戸乃ふち藤浪　上下句在 藤ア
八 吾屋前之非時藤のめつらしく　下句在 藤ア
八 我屋戸小月押照有　下句在月ア　郭公ア
八 吾妹兒之家乃垣内乃さゆり花　下句在百合ア　ゆりと邪とくなり
八 公之家有尾花し念　下句在尾花ア　尾花と緑ともいへり
八 吾屋戸乃草花上之　下句在瀧ア　又荻ア

八 をしすゝき尾花逆葺黒木用造有室ハ迄萬代

八 青丹吉奈良乃山有黒木用造有室ハ雖居不飽かも　長句次句在楊ア　伊ハ發語也门ゝ也

八 伊加登伊可等有吾屋前之百枝之　上句在萩ア

八 吾屋戸之浅茅之花乃散去見ハ　茅ア　上句秋と思ふねれつゝ庭ハ難賤

八 吾屋戸ハ黄変蝦手　下句在木ア

八 吾妹之屋戸し栗まりし　上句在

九 鴈使ハ宿るあり　鴈ア

九 客人之宿せむ野ハ霜降ハ

九 秋ハ家思宿かるしき　上句在宿ア

九 独去兒ハ屋戸借申さと　上句在家ア

十 国霞八重山越而ちつこ鳥吟や汝来屋戸ハしめゝもよ

十 吾屋前之毛桃之下ハ　下句在桃ア

十 吾屋前之浅茅之本ハきりぎりす鳴も　上句在秋風ア　蕉ア

十 我屋前之芽子之若末長　下句在萩ア　吾屋戸ノ行在萩ア数多略く

十 織女之其屋戸ハ　在七夕ア

十 秋田かり借廬之宿りほと及　下句在廬ア

十 吾屋戸ハ鳴しかりつる　下句在鴈ア

十 新草乃生有屋外之草絶ハ　下句在蕉ア

十 草深蟋蟀多鳴屋前　下句在萩ア　蕉ア

十 我屋戸之田葛葉日殊色付ぬ　下句在葛ア

十 我屋戸ハ暁日暮零之露も　上句在露ア

十 我屋戸ハ蕎子太草　下句在草ア

十一 吾屋戸之草さへ思ひうらぶれにけり　上句在草ア

十一 吾屋戸来喚足千根乃　上下句在母ア

十一 吾屋戸之穂蓼古幹 下句在八 蓼ア

十二 今夜将至屋戸ニ閉勿勤 上句人見而ハ事とかめせぬ夢にわれ

十二 十月しくれの雨にぬれつゝや君か行らん宿か借らむ

十二 十月雨間不置ふりにしはいつれの里の宿か借らまし

十三 葦津之濱小屋取すとも 上句在神ア 名衣ニ津ア

十四 わかもろのておのかいさこて猪てやまふに宿とりかつね

十五 吾妹之ゆく海邊乃宿とふとさうぬるハ 下句在 霧ア

十五 もりあのうふに宿とりせまし 上句在作ア 名衣ア

十五 さりあかしよ宿とくもあし 上句在舟ア 名衣ア

十五 いさつゝ人名ひのやとりと 上句在八[illegible]ひとのみないしゃて

十五 ゆきのれに宿とりすうても 上句ねりもの[illegible] あめのことふ稀也

十五 おきのうらに宿とりすうても 上句在俳ア 奥ア

十五 こと[illegible]のわきにに宿とりすへし 長歌

十五 さよ野に宿とりすきとひとりの 下句在 夢ア

十五 つまもれむき道に宿とりせらしむ 長歌

十五 世をゑれまろれ葉かつあとましむ 下句在 松ア アレハ神也

十七 屋所經ハ秋も乙女か 長歌

十七 鶴鳴ゆくとひとおもふ道て花橘の[illegible]ふこの宿と 長歌

十八 めいれ野れすきとうへふゆきに宿とうちつろうる 佐

十八 宿ふさけれさとの宿とりそろてるに 下句在夢ア 名衣ニ置ア

十九 山振を屋戸に引うへて 長歌

十九 山吹を屋戸にうへてい見ことに 下句在 歌ア 下句在 歌ア

十九 屋戸乃黄葉ちりぬへくみゆる 上句在 紅葉ア

十九 言貝哀 むくろふにえしき屋戸も大皇座むと知らませ

十九 君之屋戸尓し千年(トセ)はく[illegible] 上句在部ア [illegible]心也

十九 矢形(ヤカタ)尾乃ましろ鷹を屋戸尓すゑ 下句在鷹ア

十九 [illegible]村行[illegible] 下句在風ア

まつる[illegible] 上句在鷹ア

許(リ) [illegible]云同事也 [illegible]同

七 妹許(イモカリ)[illegible]我通路の[illegible]のすゝき 下句有露ア

八 妹許(イモカリ)と吾去(ワカユク)道乃河有ハ附目(ヒトメ)緘(ツツミ)と夜更(ヨフケ)降 [illegible]

九 妹許将遣(ヤラン)黄葉(モミチ)手折(タ)奈 上句在紅葉ア

九 妹等許(ラカリ)今木(イマキ)乃嶺茂立 下句在松ア

十 妹許(カ)と馬鞍置而射駒山 下句在白雲 名所ア

十一 妹許(カリトイヒ)云七日訓来 上句 淡海之奥白波[illegible]

十四 伊勢物語 いもりと[illegible]

十四 伊勢物語 いもり[illegible]

八 君之許(カリ)遣(ヤラハ)志[illegible] 上句[illegible]梅花

八 今夜乃君之我許(ワカリ)来ましも 上句久方之漢介舩泛而

十一 我許(ワカリ)不来ハ吾将恋(コヒメ)やも 上句判竹ノ歯隠有

十四 [illegible]

十四 [illegible]

十二 妻許(ツマカリ)云足を厳 上句在楊ア

十三 余許(ワカモトニ) 長哥

所

一 大宮處(トコロ) 巻々数多 又十三巻宮処(トコロ)

三 我王之幸行處(トコロ) 上句清江のきし[illegible]松原遠邨

三 [illegible]行幸之處 長哥 [illegible]

三 遐代不神さいゆし行章慶　出本末句也　伊与温泉にあり

七 百師木乃大宮ぐ賠遇鬼奥辰来不依有せい失ゝまゝすと

九 家地　在家ア

奥城所　長哥　墓事也詳地儀ア

二 彼所ふちりきし　末句也　在雪ア

四 彼所もゝ　在田ア

九 彼所の妻もゝ　在栗ア　妻ア

十九 彼所此間も　長哥

十三 此所　在都ア

三 何處　在宿ア　又七巻旅ア　八巻　部立ア　十巻　部立ア　盾ア

三 何所　在世ア　又十六巻　何所

四 何處　在人倫ア　セミ　又七巻　円ア

七 妹所　在許ア　又十一巻

十一 妻所　在許ア　又十三巻　余所

隣

九 猜並隣之君ハ　長哥

いミつもとかもゝそかいゝしむ忠のゝハゝのゝのさねよりてをなへと

倉

十六 枳棘原苅除曽氣倉将立屎遠麻礼櫛造刀自

十六 荒城田乃子師田乃稲乎倉不擧藏而　哀しくかゝりくしろかくゝしく多事し　譯詞ア

厩

十 驛路不引舟ことし直来不　末句在　舟ア

十三 赤駒厩立黒駒厩立而彼守飼　長哥

十三 金厩立而飼駒角厩立而飼駒　七哥　東ハ左馬寮　西ハ右馬寮

十四 すゞ鈴乃波由馬宇馬夜驛つゝみ井乃 下句在井ア

十五 まゆふもとそゑずなりせハこゝゆくいゆりか此ゆ馬屋乃ふかし 杯 ハイニハ早馬やウニやハ驛也

廿 宇麻 うまやなしりなハくゆいつてゆ乃杯とりん 下句在馬ア

さき 自安云さきハ城郭也

廿 筑紫国ハ安多麻毛流於佐倍乃城曽等閑食 長歌

まさの 大人云寝不やと云也住不ふりてまさしきすゞおつるかまりて也 自安云寝不と云やみハ住不也 云在什中

四 まくはつまてあ言ゝり薦之乱而念君之直香當

十三 まれハ子恋妹之正香介 長歌 未句也

十三 さきすまて黙然あしまとなにうて君之正香乎人之告つる

十三 我心盡之山之黄葉之散過去常公之正香乎 長歌 未句也

十四 安我毛いいまさしかるしらさまくゝめこれいゝ野乃ゆりへきるらん 麻花香 言乱人之言にし

十四 いそれろいのそりハゞ纎もありふかふまゝ経てまさらしまりハ 麻九可

注に云々のんいいなのこれそりハうとしあまてもうくハさそあらん かきくしいさすしきとんか

十四 わきゆきすゝきへもを緋いもまさしそいまとねゆうゆそかに杯れし

十五 妹義ゝ多太可乎まさきくて 長歌 自安云タゝカニサカ日

十八 さゆれあゆまもしあたゆと出へそまれ麻尼可もうるいしミすれ

国

七 夏秋房之下途衣裁吾妹裏儲吾為裁者差大裁 旋頭歌也

窓

十八 窓超小月臨照而足檜乃下風吹夜ハ公をしそ念 あるまさつりともまあかつき紐て

十四 うきつまのすくりしまろふあさりさし

注に云鈎月のさしいてゆのよのくらすくこゑまへまくりし窓しと云窓ハよくよりてもたかくよみれをえつきしと云へり 上野国歌也

戸

鳴以てとよと云 注に云とよと云いとへ動作との義ともの鳴鶏也門戸をとうと云てへのたてるとひ

三 豊国乃鏡山之石戸立ろく我まさしまそと不来座

三 石戸破手力もがも手弱き女にしあれば術の知らなく

三 石室戸に立在松樹 下句在露ア

四 小金門に物悲良尓念有之 長歌云 同安云戸ニカキカケタルツカナト云也

九 金門にし人の来立八夜中にも身はたな知らず出てそ相ける 上句さしの岩戸やなきし 同安云カナトハタカリヤ人ノ門ヲ置所也

十四 こもりく奈良はゆくへ無しと

十四 かるそとわかきまゆをひろく続ぬれはあまひおもとに此みゆる紙よと見ゆとて 阿未

註尺云みるそてをとは、むらはしく … ひきとれしや

わかきまゆは … 待也

十四 かへるてに手くもしとらしてや 上句さしぬりのふしとし あるもの

十四 事不問木尚味狭藍諸茅等之綠乃村戸二所訴来

事不問木すら … 紅おちてれはあらし

同安云 …

九 さなす依多斗とし … ふきつさしよりて 入ハ秋流手トリヨリテヤ

十二 奥山之真木乃板戸乎押開思恵也出来根後ハ何将為 上句さるすハかはすまし

十二 奥山之真木之板戸乎音速三妹之當乃霜上小宿ね

十四 杉やまも真木乃依多度乎ロてロして 上句ロろひらくしよりこそあさ緑

八 朝戸将開 在郭公 まへこし

十 朝戸出乃君之儀乎曲不見而長春日を恋やらくさむ

十 朝戸と開お見ハ 上句在秀ア 夜ア

十二 朝戸出公足結乎閏露原 下句在夜ア 旋以奇地 上句夕凝霜置に

十二 朝戸出跡疏而人に寺の

十三 且戸遣乎速莫開味澤相目之乏流君今夜来座有

十二 且戸開ハ所見霧かも 上句在 露ア 佗乃筆

廿 わさそてのるしき吾子 世奇

十一 足日木能山桜戸乎開置而吾待君乎誰留流

十二 吾妹子之夜戸出乃光儀見而之従情空有地者

十三 門立而戸毛閉而有乎 門アア

十三 門立而戸八雖闔盗人之 門アア

十三 入而且将眠戸開為 長哥

十三 開而木部行君をいつしかまたむ よる九夜ふけてさいゆねと

十四 あしひきの屋戸におりふくかふきたかぬ屋のてい

註人云

廿一

廿二 いさかさ

年良佗麻乃久留小……

注人云

門

一 吾作日之御門小 今哥 日之御門とハ帝都也

一 日経乃大御門小 同 大人云東門也

一 日緯乃大御門に 同 大人云南門なるへし 日本紀才七巻ニ以東西為日縦以南北為日横山陽日影面山陰日背面 日本紀日緯ハ南北也日ノタテハ東西也

一 背友乃大御門に 長哥 大人云北門にあたる

一 影友乃大御門に 同 大人云南大門也以上藤原宮にあたる

二 大御門始賜而 同 藤原宮ノ新都ト云

二 皇子乃御門之 同 斉明巻皇子乃御門と 又三巻 高光吾日ノ皇子乃伊座世ハ

鳴御門ハ荒さしまと よる

二 常都御門と侍宿りし　上句ハ遊ぶ…乃君かも

二 吾御門千代常登婆尓将栄と　下句在　秋ア

二 東乃多藝能御門尓雖伺侍　昨日も今日も召言もなし

二 東乃大寸御門手入不勝りし　上句一日ニハ千遍参入し

十六 東中門由参納　古今

二 久堅能天都御門と懼し定賜而　古今　末句明日香乃真神之原ニ

二 外門之人も　古今

二 埴安乃御門之原尓　古今　埴安云名所也

三 皇祖神之御門之外重尓立候内重尓仕奉　古今

十二 皇祖乃神乃御門手懼見と侍従時尓あへる公かも

九 ミかとさらすて　末句也御門不去して

十二 凡吾之念ハかくふり離御門手退出めやも

十三 君之御門と如天仰而見つ　古今

十八 大王代三門乃まもり

二 天原石門と開　同

十 天漢門　数多在　七夕ア

十六 神之門渡　末句也在居ア　目安云イカツチ鳴ニ比儀也

二 いもかゝとむらしを此山　同　末句也

七 妹門出入乃河之瀬を速見まろ馬爪衝家思らしも

九 妹門入出見川乃床なめ尓三雪遺未冬かも　泉河作也　床ハ常也

十一 妹門去過不勝都久方乃雨もふらねか其因尓せむ

十一 妹門去過不得而草結　下句在風ア

十四 いもかかといやとほそきぬつくはやま　下句かくれぬほとにそてはふりてな

八 妹家之門田見をとうちこ　田ア　下句在

十 橋と守部乃弃戸之門田早稲　下句在四ア稲ア
上句ノ[illegible]
四 門くも立妹かまつらむ
四 門くも立夕占問　第一句月夜よ以下句是トとおせし行手欲為　又十七巻ニ寄度ニ[illegible]　十首
十六 門ニ出立足占して　第一句月夜好
十六 門ニ出立雖待来不座　下句注ニ見ゆ　上句嘆離狼狩将来ゞ不来ヽ飲風而　都ニまつや
十九 あしひきの山にも[illegible]多にとゝまりつ　十首
十二 門ニ出而吾反側乎人見きむかも　上句会よしやまりよし
十四 わかこまの可度立手しついてそふ　下句在東ア　アカハ我也
廿 [illegible]門にとすれいあち縁乃　十首
十七 あきの[illegible]門くもり[illegible]　十首
四 [illegible]ものゝ新を見ゆ紙ハ蓋門も紉返却らし
六 豫公来座むと知せ[illegible]門よ我とふむ珠数ましめと

八 伊加登伊可等有吾屋前ニ　十首　伊ハ發語門ここニ詞也
九 不召ニハ門至ね　十首
九 金門ニし人乃来立ハ夜中ふし　下句在示ア　外金門多在示ア
九 家門をつらかせり　上句在家ア
十一 憲死くく哉我妹吾家門ゑ行
十 念之餘者為便無三出署行之其門乎見介
十二 明日ハ其門将去いてそんよ憲有容儀數知ませむ
十二 不往吾来とそ夜門も不閉わかれまさしこ待つゝあらむ
十二 門立而戸も閉而あらといつこよ[illegible]入来而夢ニみえし　四十二首　同巻
十三 門立而戸ハ雖闔盗人之穿穴より入而見されむ
十三 石床笑根延門と　十首
十三 石床之根延門ニ　十首

十三 門座庭子内小雖至痛之意今還金 上句在 芽ア

十 吾門乃浅茅う〜〜葉色付ふけり 上句在 茅ア

十 吾門之浅茅色就長忌張能 下句在 茅ア

十 我門ゝ禁田とミれい 下句在 田ア

十二 我門よ蓑笠不蒙而来有人哉誰 上句久堅乃雨零日乎

十六 吾門之榎実もり喫百千鳥 下句在木ア 鳥ア

十六 吾門よ千鳥数鳴起余 下句在鳥ア 妻ア

十九 我門従喧過度霍公鳥 下句在 郭公ア

廿 和加ミ都 宮かとのいつりとやうきいつも 下句在 柳ア

廿 わか門のへやまつ可度 とあし 下句在 椿ア

廿 わか門とすき度しるらけくるて 上句ほしきすまつくあさけいろせい

庭

十 朝庭取撫賜夕庭倚縁立之御執乃梓弓之 奈加弭乃音為

十三 朝庭出居而嘆夕庭入居而思 長歌

十二 朝庭出座而嘆夕庭入座恋乍 日

十七 あさ尓波尓いてたちならし暮庭ふみならすきす 日

九 大王乃等保乃朝庭と 又六巻十五巻朝庭とミとくるまもる 各長歌

二 たもつとのうつし涙 は都在地儀 涙ア

四 庭立麻手刈干布慕 下句在麻ア

四 天地之共久住はむと念而わりし家之庭はも

七 春日山押而照有此月ハ妹之庭毛清有けり 上句在月ア

八 白露乃置此庭小こほろきと鳴も 露ア 蛬ア

八 沫雪乃庭小零敷寒夜乎 下句在 雪ア

十 沫雪零有庭もはたらの小 上句在 雪ア はたらの事 詳雪ア

十 庭もはだらに雪落有 上句在雪ア 或云庭もほどろに

十 白雪庭尓零置つ 上句在零ア 梅ア

十七 庭にふる雪はちへしく 下句在雪ア

十 梅之花散庭とらむ人や孰 上句在梅ア 部ア

十 庭草尓村雨落而きりきりす 下句在蓋ア

十一 念人出むと知ハ八重むぐら霞庭尓珠布ましを

十二 君まつと庭のみ居ハうちなびく吾黒髪尓霜ぞ置尓けり

或本尾句云白細之吾衣手尓露ぞ置尓けり

十四 余波 [illegible] 下句在衾ア 浄麻ア 衾ア

十四 余波 [illegible]

十六 庭立住退莫立 十六

十七 遊内乃たのしき庭尓梅柳 下句在梅柳ア

上句おのゝくと ... あとまハこもしき句

十八 ... 余波尓半縁りて 下句在殿ア

十九 吾園之李花可庭尓落 下句在李ア

廿 余波奈加継あすハ ... 下句あ ...

廿 ...

廿 ...

砌

十三 大殿之砌志美弥尓露負而靡芽子乎 廿一

垣

二 朝晴殷衣垣測之隠耳 廿一 ... 事縁出ア

十一 玉情石垣測之隠ハ 下句在測ア

十一 石垣渕のこもりてつる 上句在渕ア

十一 石垣淵間乃水隠尓 上句左二 隠ア水ア
四 未通女等之袖振山乃水垣之久時従憶寸吾者
十一 處女等乎袖振山水垣久時由念来吾等者
十三 瑞垣久時従戀為者吾帯緩朝夕毎
四 垣穂成人辞聞而わかせこか情なゆめいわかねこのころ
九 垣保成人之横辞繁しもあかね日数多月の遍らし
九 垣廬成人之誂時 右句 月なる垣ほなすとへたつるやそ 大哥
十二 垣廬鳴人雖云狛錦紐解開公無
六 立名附青垣隠河次乃 右句 廿青垣ハ山名也 立ツタヘトヨメリ心ハタチツヽク也
六 押照難波乃国ハ葦垣乃古郷と 右句
九 葦垣之思乱而 右句 又十三葦垣乃思乱而 右句
十一 葦垣越小直一目ちいさく見故千遍嘆津 第一句苑細 右点

十一 蘆垣越尓与知もとなめいここの事乃左太多寸
十二 蘆垣之中之似児草 在哥
十九 葦垣之末掻別而君越と人尓勿告事ハ多落
十七 あしかきのほかにきゝつゝあまたしるしも
十七 あしかきのほかにもきみかよりそひてあらし
廿 わかさしくまとふあちへてよりもこく 下句在ア めのくさ也
七 垣越犬召越鳥猟為公 下句在鷹ア 旋頭哥也
十三 垣越尓麦咋駒乃 下句在麦ア
十四 久敵ゆかまきさむ古宗馬餓ろのを 下句在麦ア馬ア
廿 まきもこか家乃垣内のさゆり花 下句在 家ツヤトヽヨム
九 小垣内之麻とる千 右句
九 三歳之間よ墻も無 右句

十 いもか垣間ハ荒来りとも　上句袁去ハ宇乃かくてしまる歌し

十一 玉垣入風所見去子故　上句缺歌合成

十 鴬之往来垣根乃宇能花之　下句在 外花ア

十 瓊之寸戸我竹垣編目ゆも妹し見えなハ吾戀めやも

註云わくしくへ多る竹垣也すこしこもろの中ふてそうろとつも

十一 荒垣之外也ありとしも悪有らくふ　上句異なく言縁事辛

十一 千葉破神之伊垣も可越今ハ吾名之惜無

十二 蒼草垣も繁森ト雖殖有　下句在 忌草ア

十三 月南備乃清三田屋乃垣津田乃　長哥 月安富ノメクリニ垣ツミクルヲ云し

十四 可伎都楊疑宇礼都美可良思垣ト在柳ア

十八 よも世こゝ毒るきしくさりれさもこもか　下句在 柳ア

十九 鶯の鳴しくきりまゆほてりし　下句在 梅ア

籬

四 よ妹かこゝ屋戸乃籬を見ふ往ハ蓋門より将返却しも

四 打麻小荊垣乃すゝし欲見将行己云哉君を見ふこそ

十 奈良山乃峯尚霧合うへしこそ荊垣之下乃雪ハ不消けれ

柱

二 宮柱太布座　長哥

六 宮柱太敷奉　同

廿 義也波之良布刀之利ゐそしらぬとさりみて　同

二 真木柱太心ハ有之しと此君心鎮かね川も　大宮よの木い柱之一名也

六 長楊之宮ハ真木柱太高敷而　長哥

七 真木柱作るまくいさつめ小　下句在 麻ア

廿 麻気波之良まかもしらほそけくもえこの花こしと　下句在 殿ア

寝

十一 我屋戸乃䓗子太草雖生恋忘草見未生

床 十六巻ニ床敷ふよわりハつ様にをもしと云詞と 或本ニ云とこ羽ニ入言語り

二十 烏玉乃夜床も荒らむ 長哥

十四 つもり手枕許尓 上句略上句云々比等乃ものいへ 自安云夜床ノ事也

十八 ぬえ玉乃夜床かたより 長哥 自安云淑ノ氷也

廿 由等許りもかるしきいもわいさもかるしも 上句在所ニハ ヌトコハ夜床也

二 萱床ニ自伏君之 長哥

二 玉床之外向来妹木枕 上句在 家ア

十 明日よりハなる玉麻を折拂 下句云よい不宿ぬりし寐 廿ク之テ也

九 敷まつきまつきてきす 長哥 ぶいらへ也

十一 床簀不去夢所見与 上句里遠ミそちとれけまもり真鏡

十一 床重不去黄楊枕 上下句在 枕ア

十二 床邊不離夢所見乞 上句へぬもいとらいいふあいめやも

六 毎夜床聚乃帯乃ぬしも 上句在 聚ア

八 夕者床打拂 長哥

十七 夕されバとこうちはらいぬいかすたに黒髪しきて 長哥 登許

十一 真袖持床打拂君待居之間ふ月傾

十三 三袖持床打拂 長哥

十 こほりくも吾床隔ふ鳴作本名 下句在 釜ア 読以字也

十六 狛錦紐片叙床落ふけり 下句在 紐ア 読以字也

十八 ぬる無床ふ靡而宿らむ 上句ねいものいもり黒かさと今夜もり

十六 彼方之赤土少屋尓霂零床共所沾於身副我妹

十三 石床之根延門を 長哥 又同巻ニ石門よ 長哥

十三 此床乃比師ミ乃あそ鳴つゝも 十一 以上海中ノ例ニヒトヽトヽ泣ミ云

十三 奥床ニ母ハ睡タリ外床ニ父ハ寝タリ 十三

十四 ますらをのゆめかみかうたかひすけりこそむかしこそれへにもよ

十四 いもかいもとのあかりにいとくらき 下句在

十七 いぶいへすゝかはかゝこれへよ 上句多瑳多ゆゆきまとさしくわもと かくれ執

十七 こゝろにそいあし 十一 意卧也

十九 朝床ニ聞ハ遥し射水河朝こぎしつゝ唱船人 小巻又在之

十九 般上 岐 床座如 十二

座 十九巻鳥座在鳥ア 又座ゝ多詞多不及載之

十八 高御座安麻能日継登 十八

棚

十六 食薦敷蔓菁煮將來樑尓行騰懸而息此公

壁

十六 新室壁草苅ニ御座給根 下句在草ア 蔵乃所也 [illegible]

屋称 板在 [illegible]

四 板盖之黒木乃屋根ハ山近之明日取而持将参来

十二 十寸板持盖流板目乃不令相者如何為ここ吾宿始兼

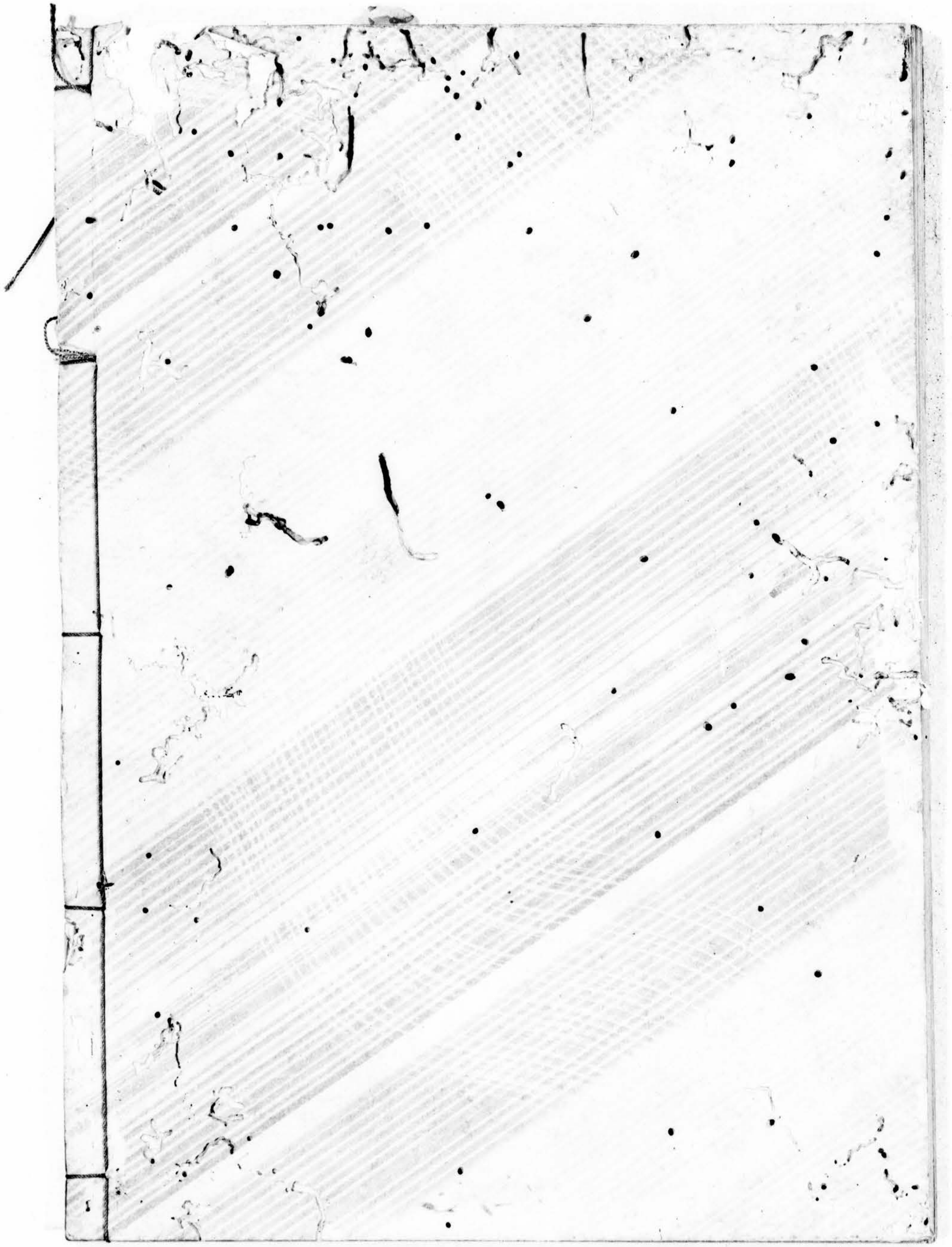
板 在前部

五 さなすいゑとゝもしらさいゑとりよりて 十四

さらすといへすしてこそよりてとハ手とりよりてや けれ板屋根の部ア部ニあり

延徳三年依　勅命

部類之

権大納言藤原宣胤

九州大學圖書印